

「SE が考えていることは常に正しい」。

強い言葉である。この発言を聞いたのは1年半ほど前だが今でも記憶に残っている。

SEとはシステムズエンジニアを指し、情報システムの企画、設計、開発、運用にかかわるすべての人を指す。企業の情報システム部門やシステム子会社にいるSE、メーカーやソフトハウスなどIT企業にいるSE、組織に属さずコンサルタントなどをしているSE、すべて含む。

「SEが考えていることは常に正しい」とすると、「正しくないことを考えている人」がいるはずだ。

それは「ビジネス側の人たち」である。情報システムを利用する人たちと言い換えてもよい。経営者、事業部門の長や部員、管理部門の長や部員、関連会社や取引先の経営者や社員、すべて含む。

SEが情報システムを企画、設計、開発、運用していこうとすると、ビジネス側の人たちと意見が衝突することが往々にしてある。

「会社を預かるものとして君の提案は受け入れられない。そこまでやることはない。第一、カネがかかりすぎる。会社の状況を分かっているのかね」。

「仕事のやり方を変えろということか。何の権限があって言っている」。

「その作業を事業部門がなぜやるのか。現場は忙しい。システムのことはそっちでなんとかしてもらいたい」。

「端末が動かない、早く直してくれ。バージョンアップをしておくように連絡したはず？ 知るか。カネを使うだけの君たちとは違い、こっちはカネを稼いでいるんだ」。

「SEの提案や意見は滅多に通らない」

ビジネス側から何と言われようとも正しいものは正しい。もっとも「SEが考えていることは常に正しい」と明言した人はこう続けた。

「ビジネスをもっと強くするために『こうしたらいいのではないか』と提案する。残念ながらSEの提案や意見は分かってもらえない。滅多に通らない。われわれSEの説明が下手なのか。ビジネス側が××（伏せ字）なのか」。

××（伏せ字）な人たちと押し問答をしていると疲れそうだ。しかしこの人は疲れを見せない。

「40年近いSE人生で悔しい思いを何度もしてきた。まあ人生というものは『生きていだけで丸儲け』、いつでも何でもうまくいくわけではない。それでも時々SEの考えが通る。嬉しいものです」。

一番嬉しかったのは20年以上説得を続けて、ある提案を通した時だという。

「オンラインシステムに営業担当者が現場で直接入力すべきだ、と提案したのは1980年代のはじめ。当時は『何を考えているのか』と散々怒られた。それでも現場の業務改革にはこのやり方が正しいと言い続け、2004年になってついに経営会議で決めてもらった。本当に嬉しかった。これがあるからSEは止められない」。

20年に1回では辛い。確率はもっと高いのだろうが、なかなか大変だ。

「嬉しく思う回数を増やすには、とにかく提案すること。20年かけた提案が通ったその日は嬉しかったが、翌日から次にどんな提案を出すか考え始めた。いつも考えておき、あれこれ提案する。ほとんど通らないけれど。それでも提案していくと、ビジネス側で分かってくれる人が出てくる。そういう人はどこかに必ずいる」。

正しいことを考え抜くのがSE

ここまで読まれた読者の皆様はどう思われたでしょうか。

本サイトはITpro、すなわちITのプロフェッショナル向けであり、SEの読者が多い。「まったくその通り」と共感したベテラン、「よく分かるが『常に正しい』というのは強気すぎないか」と考えた中堅、「そんなに大変な仕事なのですか」と心配する若手、色々だろう。

一方、ビジネス側の方は立腹されたり、「だからSEというのは駄目なんだ」とつぶやいたかもしれない。

発言者の名誉のために説明すると「SEが考えていることは常に正しい」という発言は、SEの職場に配置された新入社員と、ビジネス側からSEの職場に初めて異動になった人たちを前にした講演で出たものである。

「SEの仕事はなかなか良いものですよ」と伝えようとする余り、発言が過激になっただけで、ビジネス側に対する積年の恨みをぶちまけたわけでは決してない。

SEの考えは常に正しいとする意図は「一番正しいのは何か、それを真剣に考えるのがSEだ」ということである。

「経営者、事業部門、現場担当者、ビジネス側の考えや意見は立場によって異なる。中立のSEたちが事業体にとって一番良いやり方を考え、ビジネス側に提案していかなければならない」。

なぜSEは正解に到達できるのか

ごもっともだが真剣に考えると正解に到達できるのであろうか。

「SEは会社の全体像を見渡せる場所にいる。営業も、マーケティングも、経理も、商品開発の部門も全体を見ることはできない。SEにその職務権限があるかどうかは別にして、『どうしたらこの会社をもっと良くできるか』と考えるのは滅茶苦茶楽しい」。

全体を見て考えているうちに新しいやり方を思いつくことがある。ただしそのまま言ってもなかなか通らない。

「SEはどんなものでも作り出せる。ただし『飛行機を見たことがない人は飛行機を欲しがらない』。この点に注意する。提案にあたっては、ジェット機、ヘリコプター、それに新幹線の三案くらいを用意し、ビジネス側の責任者に選んでもらう。正しい案はジェット機だとしても、正しすぎると誰もついてきてくれない」。

残念なことに××（伏せ字）なビジネス側の人たちが少なからずおり、こうした人々は「会社を良くすることなどSEに期待していない。だが、期待されていなくても、職務権限が無くても、考えることなら勝手にできる」。

「会社を変えるのは俺たちだとビジネス側は言う。結構だ。ただし改革するといっても、業務の仕組みやプロセスをどう変えていくのか、その整理ができるのはSEだ。ビジネス側は『今後、我が社はおいしいコーヒーを入れていく』と宣言する。これも結構だ。われわれSEは、どの豆を選び、どう保存し、どうひいて、どう入れたらおいしいか、仕事の流れを考えて描き、おいしいコーヒーを入れる仕組みを作る」。

ビジネス側から「SEは現場を知らない」という批判がしばしば出る。

「現場に行けばいい。1週間張り付かせてもらい、仕事を分析して業務フローを描いてみると結構、分かってくる。『何のためにこの作業をしているのかな』と考えるとさらに色々見えてくる。こう言うと『現場に最低4年はいないと仕事は分からないものだよ』というおじさんが必ず出てくる。『お言葉ですが、ずっと中にいるからかえって見えないこともあります』と申し上げたい」。

会社や社会の原動力はSEの考え

40年にわたってSEを続けてきた、これから先がもっと面白い時代だと言い、次のように講演を締めくくった。

「情報システムの歴史を振り返ると、せいぜい50年。これからもっともっと進化する。新しい仕事を作り出すこともできれば、今までの仕事をまったく違ったやり方でこなすこともできる。それを考えるのがわれわれSEだ。SEが考えることはビジネス側よりも正しい。その考えが会社や組織や社会を動かし、変える原動力になる」。

発言者は東京海上日動システムズの横塚裕志社長であった。締めくくりに横塚氏がどういう人か紹介しなければならない。

ちょうどこの3月、同氏は『SEよ 大志を抱こう』と題した書籍を出版した。同書の短い紹介文を日経コンピュータに書いたので本欄向けに多少修整して転載し、人物紹介に代えたい。

* * *

大手損保で40年間、SEを続けてきた横塚裕志氏が「21世紀のSEは何をどうしていくべきか」を綴った。

本書でSEとは「新しい事業プロセスとそれを支える情報システムを設計し動かす人」を指す。所属企業や部署は問わない。つまり日経コンピュータやITproの読者全員に向けた本と言える。

横塚氏は新たな挑戦が大好きであり、要求開発、アジャイル開発、フューチャーセンター、アートを取り入れたワークショップなど数々の取り組みをしてきた。その様子を本書で報告している。

□□.....

□◆ITpro サイト 先週のベスト10【2012年4月16日~4月22日】より

□□.....

<http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/Watcher/20120414/390925/?ST=cio&mkjb&P=3>